「宇宙エレベーター」

捨拾（すてろう）　（50 代）

何故、子供たちはエレベーターの中で、ジッとしていられないのか。

答え、止まると死ぬから。

これはあながち比喩でもなく、子供がちょこまかとネズミ花火の様に動き回るのは、捕食者から身を守るために備わっている能力なのだそうだ。

力弱き間は、フットワークで敵から身を守れというワケなのだろうが、捕食者て。

いったい何万年前の話だ。

さて、ウチの子供たちも多分に漏れず、住まいのエレベーターに乗り込むと壁を蹴ったり頭を打ち付けたりと、捕食者から逃れる気は満々であり、その度にそんなに暴れるとエレベーターが止まるぞと、ボクに叱られるワケである。

すると、ふと思いついた様に４歳のムスメが言う。

「エレベーターは、どうやって動いてんの？」

なるほど、良い疑問だ。

まず、我々が乗っているこの場所、これは箱なのだよ。

「箱？」

そう、でっかいダンボール箱の中に入っていると思ってごらん。

「そのでっかい箱が、どうやって８階から１階に動いてんの？」

とは、６歳のムスコである。

ますますいいぞ、お前たち。

その箱の上に長い紐を付けて、引っ張ったり下ろしたりして、エレベーターは動いているのだよ。

「エッ！１階から８階までの長い紐なんかあんの！？」

そこに引っかかるのだなムスコよ。

じゃあ、キミが知っている１番長い紐は何かね。

「ん〜、スパゲティかなぁ」

短っ。

「じゃあ、ウドンとか？」

麺でまとめてきやがったな。腹でも空いているのか。

例えば、学校でキミたちが跳んでいる大縄跳び、あれなんか長い紐だろう。

「あー、長いなぁ」

あれよりもっと長い紐は、たくさんあるのだよ。

「じゃあ、宇宙まで届く紐とか？」

子供らしい飛躍した発想だ。

しかし、驚けキミたち、ものすごく長いカーボンっていう切れない紐で、宇宙まで昇れるエレベーターを作っている人が、実際にいるんだよ。

「えー！！」

キミたちが大人になる頃には、完成しているんじゃないかな。

「ワタシが、おばあちゃんになったぐらい？」

いや、そんなに先じゃなくて、キミたちがとーちゃんぐらいの歳になった時には、もう普通にあると思うよ、宇宙エレベーター。

子供たちと大きな話をするのは、いいものだ。

現に二人は、まだ見ぬ宇宙エレベーターに乗って、どんどん上昇している様に空を見上げていた。

「その時は、とーちゃんは何歳？」

いやー、さすがにもう死んでいるやろなぁ。

「死んだら、どこにおんの？」

死んだコトがないから知らんけど、空の上に行くとか言う人はおるなぁ。

「ほんだら、宇宙エレベーターで会いにいくわ」

彼らの未来が、希望に満ちたものであって欲しい。